

昭和三十三年二月二十五日、石橋湛山の突然の辞任で念願の宰相の印綬を帯びた岸信介は、皇居での認証式の後、モーニング姿のまま帝園ホテルの一室に向かう。そこにはCIAのA1作員がいた。日本の「国のかたち」を歪めた裏切りの首相が、ついに明らかになった！



岸信介はアメリカの エージェントだった！

米国がリクルートした中で最も有力な二人のエージェントは、日本政府をコントロールするというCIAの任務遂行に協力した。〈そのうちの一人〉岸信介はCIAの助けを借りて日本の首相となり、与党の総裁になった。〈タイム・ウィナー〉著『LEGACY of ASHES The History of the CIA』より

り
期限切れが十一月一日に迫ったテロ特措法をめぐり、日本の政界は混乱の極みに陥っている。安倍晋三前首相は「延長に」職を賭す覚悟」と明言し、見通しが立たなくなると、突然の退陣を表明した。
参院選に大敗しても政権にしがみついていた安倍氏

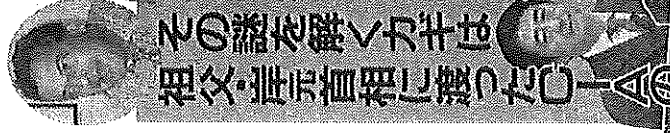
ティム・ウィナー氏と著書『灰の遺産』

が、なぜ政権を投げ出してまで米軍のために自衛隊をインド洋に派遣し続けなければならないと考えたのか。さらに、福田康夫氏も、安倍氏の後を襲って首相になることが見えてきた途端、新法による派遣継続を打ち出している。自由民主党には、アメリカの外交政

策に逆らえないDNAでもあるかのようだ。
その自民党を保守合同によって作り上げたのは、安倍前首相が敬愛してやまない祖父・岸信介元首相である。また今日のアメリカとの同盟関係の根幹をなす日米安全保障条約改定も、岸によってなされたものだ。



安倍前総理はなぜテロ特措法を延長をまねいただけで政権を投げ出したのか。その謎を解くカギは祖父・岸元首相に寝たCIAの秘密責任にあり



CIAの秘密責任にあり

今年六月、米国で出版された『LEGACY of ASHES The History of the CIA (灰の遺産 CIAの歴史)』は、自民党が結党以来、どのようにして外交政策を決定してきたのか、そして、

岸の系譜は福田起夫、安倍晋太郎、安倍晋三、そして福田康夫へと受け継がれた

(上) アイゼンハワー大統領
(中) アレン・ダレス CIA長官
(下) ジョージン・ダレス 国務長官



そのスタートラインには岸とアメリカとの間に「蘭の取引」があったことを明らかにしている。

岸は日本の外交政策を米国の希望に沿うように変えようと約束した。そして米国は、在日米軍基地を維持することができ、日本においては極めて微妙な問題をはらんでいたが、そこに核兵器を貯蔵することができた。その見返りとして岸が求めたのは、米国からの秘密裏の政治的支援だった。

「秘密裏の政治的支援」とは、ずばりCIAからの巨額のカネだと、ウィナー氏は著書で断定している。

岸とCIAの関わりについては、これまでも指摘されてきたが、CIAからの資金提供を示す決定的な証

拠、証言が示されたことはなかった。しかしウィナー氏は序文で高らかに宣言している。
この本は記録に基づいて



いる。匿名の情報源も、出所不明の引用も、伝聞も一切ない。全編が一次情報と一次資料によって構成された初めてのCIAの歴史である。

ウィナー氏はニューヨーク・タイムズの現役記者。過去には国防総省に関する一連のレポートでピューリッツァー賞を受賞している。彼は二十年という歳月を費やして世界最大の情報機関であるCIA（米中央情報局）を取材した。秘密指定を解除された機密文書や二百人を超す外交関係者のオラル・ヒストリー、三百人以上の関係者へのインタビューをもとに書き上げたのが本書である。

さっそく小誌取材班は、ウィナー氏に取材を申し込んだ。ニューヨーク・タイムズの新社屋で、ウィナー氏はこう切り出した。

「一九九四年のことです。CIAと米国政府の秘密作戦について取材していた私は、米国務省が毎年発行している『米国の外交』の発行が遅れていることを知りました。CIAの自民党に

対する支援について記述することに、CIAが難色を示したことが原因でした」

そこでウィナー氏は、対日工作に従事していた当事者たちに取材を始める。

対象はアル・ウルマー元CIA極東部長、アレクシスジョンソン元駐日大使、ロジャー・ヒルズマン元国務次官補（極東担当）、そしてマッカーサー二世元駐日大使らである。彼らはCIAの対日工作について全貌

交渉相手はマッカーサー元帥の甥

岸は首相に就任する以前から、CIAを含む米国人脈を築きあげ、その人脈を遇して米国側に自らの政權構想への理解を求めていた。その構想には、保守派を台同して自由民主党を結成することや、安保改定の計画までもがすでに含まれていた。

同時に岸は日本政界についてのさまざまな情報をCIAに提供した。その見返りとして岸がCIAに求めたのが、政界工作資金だったのだ。岸はCIAのエ

レを知りうる立場にあった。「すると、彼ら全員が（岸に対する）支援について事実だと認めたのです」

ウィナー氏は、二人の同僚と共同で行なった取材をもとに、ニューヨーク・タイムズに「CIAが五〇年代、六〇年代に日本の右派を支援」（九四年十月九日付）という記事を書いた。

彼ら証言者が語る、岸とCIAの関係とは、どのようなものだったのか。

ジエントであった。冒頭の米国がリクルートした中で最も有力な二人のエージェントの一人は岸であり、もう一人は児玉誉士夫である。

そして岸は首相の座につくや、CIAと協力して新安保条約を練り直すことを約束した。

交渉相手は、マッカーサー元帥の甥、ダグラス・マッカーサー二世だった。

岸は新任の駐日米国大使のマッカーサー二世にこう話した。もし自分の権力基

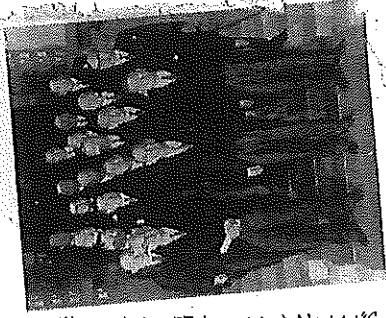
盤を固めることに米国が協力すれば、新安保保障条約は可決されるだろうし、高まる左翼の潮流を食い止めることができる、と。岸がCIAに求めたのは、断続的に支払われる裏金ではなく、永続的な支援財源だった。「日本が共産党の手に落ちれば、どうして他のアジア諸国がそれに追随しないでいられるだろうか」と岸に説得された、とマッカーサー二世は振り返った。

当時、アメリカの対日政策は転換期にあった。東西冷戦の激化に伴い、日本を共産主義に対する「防波堤」とすべく、再軍備と自立を促す方針に転換したのである。

「逆コース」と呼ばれるこの政策転換は、四七年から四八年に起きた。この一環で公職追放解除が行なわれ、追放されていた岸も五三年に政界復帰した。米国は保守派を結集し、再軍備をも辞さない強力な指導者を求めていたのである。

マッカーサー二世の証言からは、岸がこうした状況に乗じて、米国側から資金

ついに権力の頂点に立った岸



を引き出そうとしたことが読み取れる。
そして、五八年五月の日本の総選挙前、アイゼンハワー大統領は岸に資金援助することを決定した。
ヘンリク・フォスター・ダレス（國務長官）も同じ意見だった。ダレスは、米国は大金を支払ってでも日本に賭けるべきで、米国が賭ける相手として最も有望なのが岸であると主張した。アイゼンハワー大統領自身が安全保障条約のために日本に対する政治的支援を決断したが、それはすなわち、岸に対して米国が資金援助することを意味した。アイゼンハワーは主要な自民党員にCIAから継続的に献金することを承認した。
「そのような資金が、四人の歴代大統領のもとで少なくとも十五年のあいだ流れ、

冷戦期の日本で一党支配を強化することに貢献した」
自民党が権力の座を維持するために必要なカネはアメリカから供給されていた。その代償は、安保改定を含む、日本がアメリカにとって都合のいい国になることだった。
アイゼンハワー大統領が主要な保守政治家への資金援助を決定したことは、昨年七月刊行の『米国の外交一九六四―一九六八』にやっと記された。ウイナ―氏が記事を發表してから十二年後の昨年、國務省はようやく問題の記述を一部公開したというわけだ。
だが、國務省は関連する

秘密文書をその目で確認した

シャラー教授はこう語った。
「私はCIAから岸への資金提供を示す文書をこの目で見ています。日米関係の著作を書くために長期の調査をしていたとき、國務省の委員会にいたときです。そこには『〇日、〇〇において〇〇ドルが渡され

外交文書そのものを公開したわけではなく、岸に対する具体的な工作を記した秘密文書は未だに公開していない。
ところが今回、小誌取材班は、その秘密文書をその目で確認した人物の決定的な証言も得ることができた。
アリゾナ大学のマイケル・シャラー教授は、アメリカ外交史が専門で、日米関係の研究でも知られるが、なにより九五年から六年間、國務省の歴史外交文書諮問委員会のメンバーを務めていた。この委員会は國務省の機密文書の秘密解除をチェックする役割を果している。

た」といったことが書いてあったと記憶しています。この資金は岸個人のポケットに入ったのではなく、政治献金です。資金の要請は自民党の仲介者を通して行なわれていたようです。また、これだけの用意があるから情報提供してくれと米国側から要請する場合もあ

性欲減退症 不感症 陰萎
官能性神経症 強精 不眠症

PRIZMA
ホリスロホルモン精
HORIMONOL
180錠

薬価 60錠 4725円(税込)
180錠 19,500円(税込)
320錠 16,800円(税込)

飲みやすいドリンクタイプ
PRIZMAホリスロホルモン精

医薬品

PRIZMA
ホリスロホルモン精
HORIMONOL
180錠

薬価 60錠 4725円(税込)
180錠 19,500円(税込)
320錠 16,800円(税込)

のんだ効く!

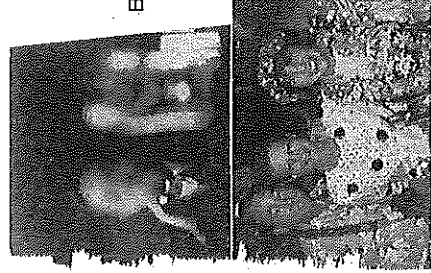
PRIZMAホリスロホルモン錠

この医薬品は、「使用上の注意」をよく読んで正しくお使い下さい。
◆全国有名薬局・薬店にあり ◆錠剤品に注意「プリズマ」とご指定下さい。
◆深島品切時は薬価(税込)を同封の上面をお読み下さい。(送料別料)

PRIZMAホリスロホルモン錠 文春版
〒108-0074東京都港区高輪 3-19-17 ☎03(3441)5191(大代)
郵便局窓口 ☎03(30)1-8052 〒6-1-1 http://www.harasawa.co.jp

ったようです。金額は一度に二十万から三十万ドル（ドルは三百六十円で、七千二百万円から一億八千万円）だったと思います。米大統領選で投じられるほどの大きな金額ではありませんが、当時の日本にとって決して少額ではなかったはず。これらの文書は未公開ですし、公開されるまでにはまだ時間がかかるでしょう」

CIAが岸に巨額の資金を提供していたことは、間違いなく事実であった。岸に提供された一回一億円の金は現在ではいくらくらいにあたるのか。六〇年当時、首相の月給が二十五万円、国会議員は十三万円だったことから推測すれば、十億円くらいになるだろう。言うまでもなく、外国から政治資金を得ることは当時すでにあった政治資金規正法違反である。



マカポイ氏とローラー夫人(中)とオードリーさん(左)

こうして得られた資金はどのように使われたのか。米国の外交文書には、五七年と五八年の二回、岸の弟である佐藤栄作が米国側に資金援助を要請したことが記録されている。一回の資金要請は、ともに五八年の

ハート・オブ・ダークネス

「六〇年代後半から七〇年代初頭にかけて、それまで順調だったCIAと自民党の関係は複雑な問題に出くわします。それは在日米軍基地の問題です。当時の米国にとって在日米軍基地はベトナム戦争のために非常に重要でした。しかし、沖縄で左翼勢力が支配権を握れば基地が使用できなくなる恐れがあった。そこでCIAは沖縄の地方選挙に資金を投入し始めたのです」

このために使われたのが、CIAから自民党への資金提供ルートだった。

秘密工作が発覚しないように、この自民党ルートで沖縄に資金を投じることを提案したのはライシヤウィ大使だったとされる。当時

総選挙と五九年の参院選挙への対策を名目としていることから、CIAからの資金は選挙対策に投じられたと考えられる。

その後も、この資金はさまざまな用途に使われていた。ウイナー氏が語る。

の佐藤栄作政権で、六五年の沖縄の立法院選挙と六八年の主席公選にCIA資金が投入された。

それほどまでに、CIAから自民党への資金提供ルートは秘密が完全に守られていたと考えられる。CIAは、同じ敗戦国であるイタリアへの工作では、現金をアタッシュケースに詰め、渡すような荒っぽいことをしていた。しかし、岸を相手とした資金提供では、ルートは巧妙に偽装され、そこを流れる資金がCIAからのものだとはいえ、岸以外にはわからないようになっていたという。

〈CIAの役割を知らなかった政治家は、その資金が米国経済界の大物実業家か

ら出ていると聞かされていなかった〉

ウイナー氏は著書の中でロッキード社の介入を指摘している。ロッキードからの賄賂のつもりで受け取っていたカネがじつはCIAの資金であり、そのことは日本の政治家のみならず、ロッキードの担当者も気がついていない。それほど巧妙にこのルートは築き上げられていたというのだ。

ただし、この秘密のルートの存在が暴露されるようになったことがある、とウイナー氏が明かす。

『「ロッキード事件」です。すでにCIAは自民党支援をやめていましたが、過去のスキャンダルが暴露される危険があったのです』

七六年に発覚したロッキード事件では丸紅ルート、児玉ルートなどさまざまな資金ルートが取り沙汰されたが、検察が立件できたのは丸紅ルートだけで、全容解明には程遠い結果だった。もしロッキード社からの裏金提供ルートの全容が解明されると、過去のCIAと岸の秘密の関係が明る

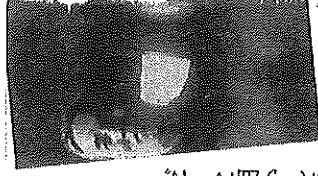
みに出る可能性があったという。

ウイナー氏はCIAの工作をこう総括した。

「資金提供の見返りにCIAが得たのは、これから誰が指導者の地位を占めるのか、日本が今後どのような方向に進むのか、といった日本政界に関する情報でした。つまり、CIAは岸から日本の政治機軸に関する情報を得て、岸はその政治機構を動かすのに必要な「油」を得ていたわけです。この関係によって米国は対日外交政策の目標を達成し、アジアにおける相当な影響力を持った反共勢力、つまり戦後の日本を作り上げたのです」

ウイナー氏は二十年に及ぶ取材を振り返って、こう語った。

「元CIAの工作人員数名にも取材しています。引用されたくないと言ったので記事では証言を紹介していませんが、彼らはさらに多くの事実を教えてくれました。彼らの一人は、『CIAの対日工作は、最も嚴重に守られた秘密だった。な



「ぜなら、それは大成功だったから」と明かしました。また一人は、『あなたが試しているそのことこそ「ハート・オブ・ダークネス」(暗黒の核心)なのです』と語りました。

「ハート・オブ・ダークネス」とは映画『地獄の黙示録』の原作となった、ジョゼフ・コンラッドの小説『闇の奥』の原題である。

ウイナード氏が取材した証言者のほとんどはすでに物語者となった。もはや「ハート・オブ・ダークネス」は、国務省の秘密文書の中にだけあるのか。

小誌取材班は、取材の最後に、ついに一人の男にたどり着いた。

クライド・マカボイ——「伝説」のCIA工作員である。彼がCIAと岸との関係において重要な役割を果たしたことも、ウイナード氏の著作で初めて明らかにされた。

当初、岸の米国人脈のキーマンは、ビル・ハッチンソンという人物だった。ハ

ッチンソンは、元OSS(戦略事務局、CIAの前身)職員で、当時は米国大使館のUSIS(広報文化交流局)でマスコミを担当し、CIAとも協力関係にあった人物である。ある日本の雑誌編集者が、彼に岸を紹介した。岸がまだ政界に復帰する前のことだった。

目黒の彼の自宅で、岸は

伝説のCIA工作員マカボイ

「岸は、米国側の窓口として、日本で無名の若い下っ端の男と直接やり取りするほうが都合がいい」と米国大使館高官のサム・バーガーに伝えた。その任務にはCIAのクライド・マカボイが当たることになった。

ウイナード氏が語る。

「今回、本を執筆するに当たって、岸とCIAのストーリーを理解する上で鍵となったのが、元CIA工作員のマカボイ氏との電話インタビューでした。彼が東京でCIAの工作員だったことを確認し、当局に残されている彼の発言内容をチェックしました。それと同

米国大使館政治部の面々と引き合わされた。ハッチンソンは大使館ではさほど高いランクではなかったため、周囲から怪しまれることなく、岸と大使館政治部の役人たちとの面会場所を提供できたのだという。

そしてハッチンソンの帰国後、登場したのがマカボイである。

時に、彼の上司だった三名の人物にも確認をとりました。彼らはマカボイの名前を聞いて驚いたようで、『あの男は最高だった。有能な工作員だった』と語っていました。

マカボイ氏は一九二六年ニューヨーク州生まれの八十一歳。十八歳で海兵隊に志願し、沖縄戦を経験している。帰国後、名門バックネル大学を卒業し、故郷の地元新聞で記者として数年を過ごした後、CIAに応募して採用され、五二年ごろ日本に派遣されていた。日本を離れた後は、タイ、インドネシア、ラオス、ビルマで

工作活動に従事し、七六年にCIAを退職。CIA在職中、彼の表向きの肩書きは「外交官」だった。退職後はコンチネンタル航空の極東支配人となり、日本に駐在していた時期もある。

彼が「伝説の工作員」になったのは、秘密に守られた日本での活動ではなく、ビルマ支庁長時代の活躍によってであった。

マカボイ氏と長年親交のあったジャーナリストのアソンニ・ポール氏が語る。「ビルマ支庁長だったころ、ビルマの麻薬王、ロー・シンハンの逮捕に一役買ったそうです」

マカボイ氏はローの部下を買収して、彼の鞆に小型発信機を装着させた。発信機により居場所を捕獲されたローは逮捕されたという。まさに007を彷彿とさせる活躍ぶりだ。インドネシアとビルマでの活動で表彰もされているという。

ウイナード氏は、現在ハワイに移り住んでいるマカボイ氏に、一昨年電話でインタビューしたという。我々がさっそく訪れたマカボイ

氏の自宅は、ホノルルから車で一時間ほどの高級住宅街にあった。豪華な邸宅が建ち並ぶ中、マカボイ氏の家はひととき目立っていた。なぜなら、正面の車寄せには石灯籠がたち、玄関は格子調で、長いアジア勤務を物語るかのように東洋趣味が際立っていたからだ。

呼び鈴を鳴らすと、妻のローラさんと長女のオードリーさんが笑顔で出迎えてくれた。長い廊下を抜けて奥のリビングに入ると、ベッドの上で上半身だけ起きたマカボイ氏がいた。ローラさんによると、数年前から週に三回の人工透析を受けており、軽い認知症の傾向も見られるようだ。

ローラさんがマカボイ氏に問いかけても、イエスかノーの言葉しか返ってこない。

しかし、幸運だったのは、長女のオードリーさんがAP通信の記者で、四歳のときから十二年間日本に住んでいたため流暢に日本語を話したことだ。

オードリーさんが語る。「子供のころから父がCI

Aではないかと疑っていましたが、聞けないでいました。十七歳のとき、思い切った母に聞いたのですが、『そんなことあるわけじゃない』と否定されました」

父の本棚のウィリアム・コルビー元CIA長官の本に父宛の直筆メッセージがあるのを見つけて、彼女は父がCIAであることを確信した。

だが、父から直接答えを聞いたのは四年前だった。

「父が急に『お前は日本語も話せるし、CIAに就職したらどうか』と勧めましたんです。余りにも熱心に勧めるので、逆にいい機会だと思って尋ねたところ、父はついにCIAだったと認めてくれたのです。それから、父は徐々にCIAでのことを話してくれるようになりました」

そして、オードリーさんは、マカボイ氏が日本駐在時代に担当していた岸との関わりについても話を聞いていたのである。

「父は岸さんと定期的に会っていたのですが、あると

き岸さんが突然総理になってしまったそうです（岸は石橋湛山首相が病氣になって辞任したため、臨時代理を経て、五七年二月二十五日に正式に首相に就任した）。その日は岸さんと会うはずだったのですが、そんな日に彼が来ることができるかどうか、疑問に思いつつも、約束した通りに帝国ホテルへ行行ったそうです。そうしたら、天皇の認証式に出た

日本が「外交」を失った原点

「岸さんが訪米してアイゼンハワー大統領と会談したとき、父もそのレセプションに参加していたそうです。しかし、自分のような下っ端の人間が岸さんと親しく話していたら周囲から怪しまれるし、岸さんとの関係がバレてしまつたら困るので、素知らぬふりをしていたと言っていました」

そして、オードリーさんはこうしめくくった。

「父は強烈な反共主義者でしたし、当時は父自身が冷戦の真っ只中にいたので、日本では岸さんにCIA

後の岸さんがキーニング姿のまま現れたので、びっくりしたと言っていました」

首相に就任した当日でさえ、約束通りにマカボイ氏に会いに来たという事実から、岸がマカボイ氏との関係、ひいてはCIAとの関係を極めて重要なものとしていたことがわかる。

また、マカボイ氏はオードリーさんにこんなエピソードも話していた。

Aが資金提供したことが物議を醸すかもしれませんが、ね。しかし、父の行なったことが日本と米国にとって果たして良かったのか、悪かったのか、今の段階では判断できないと思います。いずれ歴史によって評価が定まるのだと思います」

ウィナー氏が、

「岸は自らイニシアティブを發揮してCIAを含む米側と接触していました。彼はまるで草花を育てるように忍耐強く米側側に友人を作ろうとしていました。岸が将来を見据えた戦略家

だったことは明らかです」

と、岸がCIAから資金提供を受けたことを、マイナスには評価していない。

しかし、日本人の我々からみるとどうか。岸の行爲によって、我が国が失ったものは何だったのだろうか。

アイゼンハワーが岸への資金提供を決定した五八年五月から半年もしないうちに、安保改定への日米交渉が進んでいた。交渉のヤマ場は「核の持ち込み問題」だった。被爆国である日本にとって、核兵器への反感は強く、岸も核持ち込みはさせないと公言していた。

だが、解決策はまたしても「闇の取引」だった。安保条約調印の直前、日米間で秘密の話し合いが行なわれ、その密議は「事前協議方式に関する議事録」に記録され、秘密指定で国務省に永久保存されている。後にライシャワー元大使が暴露したように、核兵器の持ち込みを事前協議の対象とするか否かの秘密合意が、そこには隠されていると見て間違いない。つまり岸は、米国の主張する核持ち

込みを国民の目に触れない形で容認していたのだ。

安保改定に反対して国会に殺到した学生隊について、岸は後にこう語っていた。

「一部の者が国会の周りを取り巻いて手もっているだけで、国民の大部分は安保改定に関心をもっていない。その証拠に国会から二キロと離れていない銀座通りでは、いつものように若い男女が歩いているし、後樂園では何方の人が野球を見ている」(岸信介の回想)

一片の真実を言い当てているかもしれないが、岸がCIAから秘密資金の提供を受け、そのため安保改定において秘密裏に核持ち込みに関する合意をしていたことを国民が知っていたら、どうだっただろう。

岸はアメリカのエージェントとなることで、自らの権力基盤を築いた。その結果として生じた日米の歪な関係は、現在の自民党政権にまで継承されている。そして、そのことで我が国は、「外交」そのものを投げ出さざるを得なかったのである。